三陸の今（二）

教育研修委員　荒川昭男

菜の花

まだまだ厳しい状況が続く三陸の今を伝えます。

初めてボランティアに行った初夏の三陸には、津浪を受けて枯れた樹木とは対照的に、鈴蘭やアヤメが何事も無かったように群れていました。季節が少し流れ桔梗、水蓮、秋の気配と共に秋桜や秋明菊が、津浪や火災で建物が焼失した町のあちらこちらに、自然な感じで顔をのぞかせていました。

草花の生命力に改めて驚かされましたが、主に見てもらえない花々はどこか寂しげでした。

宮古市内では、町のいたる所に山積みされていた土嚢袋が撤去され、町中の景観が変わっていました。以前の日常風景をとり戻しつつあるようです。

それにしても、側溝から土嚢袋に詰められた強臭まみれの土砂の量は、一体どのくらいあったのでしょうか。

山田湾では、カキやホタテの養殖筏の数が増え、海の息吹のようなものが感じられるようになりました。

各漁港に浮かぶ船の数も少しずつ増えているようです。船のない漁港は寂びしすぎました。

以前では見かけることが無かった海鳥の姿が、それも群れとなって各入江に戻ってきていました。カモメ達は海が動き始めるのを何処で待っていたのでしょう。

やはり港の風景には、船とカモメが欠かせないようです。

6月に山田町船越で、津浪の話をしてくれたSさん宅も、津浪を受けた1階部分が綺麗にリフォームされ、以前の生活をとり戻しつつあるようでした。

流された船より小さいが、新しい船が近々来ると嬉しそうに話してくれました。ここまでの半年間大変な御苦労があったと思います。

大槌町の大槌川河川敷全体に、来春菜の花を咲かすための畑づくりの作業にも参加しました。復興のシンボルにしたいと話す発起人の金山さんは、「大槌の語り部」といわれています。

震災の日、学校から帰宅できなかった多くの児童たちは、寒さと恐怖のため全員がオネショをしたと語っていました。9月になったら、その子供達に種をまいてもらうとのことです。来春大槌川の河原が、黄色の広大な絨毯で輝くのが楽しみです。

虹

被災地でこのような明るい話題や光景に接することは、実に嬉しいことです。

肩を落とした後姿よりも、笑顔の方が見ていて元気が出ます。

しかし被災地の現実は、まだまだ筆舌に尽くしがたいことが圧倒的に多いようです。

釜石市郊外の、海岸に近い屋敷跡の片付けに行ったときのことです。

そこの奥さんが気を使って、遠方の仮住まいからわざわざ缶コーヒーや、お菓子を持って来てくれました。朴訥（ぼくとつ）とした岩手訛で奥さんが話し始めました。「家も会社も流されました」「田んぼも畑も流されました」「飼っていた牛も牛小屋も流されました」「15年間一緒に暮らしていた犬も流されました」「みんな、みんな流されてしまいました」と、訥（とつとつ）とした話に私達8名のボランティアは、奥さんの顔を見ることができず、ときどき意味のない小さな頷きをしながら、下を向いて聞いていました。

今までこのような経験が何度かあり以前は、その都度慰めの言葉をいろいろ考えました。でも見つかりませんでした。あのような体験をした人達を慰める言葉は私には考えつきません。最近は、無言で話の聞き役に徹することも、時には相手の慰めになると思うことにしています。

奥さんが帰ったあと、5百メートル程先にある津浪を止めることができなかった頑強そうな防潮堤と、鉄製の立派な水門を漠然とした気持ちで眺めていました。

気がつくと先程の時雨の影響か、淡い色彩の虹が下がり勾配の先にある防潮堤を中心にして、目線の高さで円を描いています。ぼんやり眺めていると、スーと身体が軽くなったような気がしました。落ち込んでいた私達の心を、虹が少しだけ戻してくれたようです。

「東北頑張れ」のスローガンを巷で良く見かけます。しかし、頑張っている姿を喜んでくれる家族が居ない。力を発揮する船が養殖筏が店舗が設備が職場が流されて無い。頑張った身体を心底休める家が無い。食事を得るお金が無い。励まし合う友人、同僚も失って居ない。この様な人達がまだ大勢います。

頑張るのはむしろ遠くにいる私達で、復興の為の英知を、費用を、そして現地での活動が必要だと私は考えています。復興ビジョンを考える知恵や、高額の義援金協力に自信がない私は、被災地の人達の傍でこれからも活動を続けようと思っています。

ドロドロとした汚水の中に残されたガレキの撤去作業。悪臭がなければ造作のない仕事なのだが

大槌町の市内にはまだこの様な建物が残されており、全ての解体が終了するのはいつのことか

津浪のあとの火災で近所でも評判の赤松は、黒ずんだ幹枝を残しそれでも松の威厳を保っていた

港や入江に戻ってきたカモメの群。震災後しばらく見かけなかった鳥が大群で戻ってきていた

大槌川の河川敷。津浪は土手を越え住宅を襲った。ガレキを撤去した後、菜の花畑にする整地作業

津浪で消えた山田湾の養殖筏。オランダ島と小島の周りに少しずつ筏が戻り湾の再興が進む

気仙沼市外に座す大型船。解体処分とのことだが、身近で船を見ていると現実と非現実の狭間にいるようだ

作庭塾庭守　活動報告

荒川　昭男

伊勢音頭

年配者の方なら御存知の「伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ尾張名古屋は城でもつ」の伊勢音頭。その語源が「石は吊ってもつ、吊ってもつ石は尾張名古屋の城へもつ」であることは案外知られていない。

名古屋城築城の際、大量の花崗岩が伊勢から運ばれ、小堀遠州や城石垣の名人加藤清正配下で、「両かく」と称された飯田覚兵衛や三宅角左衛門等がそれを使い、築城に取り組んだと伝えられている。

その時代石の扱いは、万力取り、セミ吊り、枕渡し、修羅送り等があり、勿論これ等は築城だけに限られたものではなく、庭石や、宝塔等の石造品を扱う手法でもあった。

当時活躍していた石工の集団は、それぞれ得意とする方法で石を運搬したとのことである。

木製回転機の万力は轆轤（ろくろ）のこと。車地（しゃち）、巻胴（まきどう）、神楽算（かぐらさん）、絞車（しぼりぐるま）等とも呼ばれた。

豊臣恩顧の大名であったが、関が原の戦いでは東軍の徳川方につき、姫路52万石の大大名となった池田輝政配下の石垣積師たちは、この万力を使って修羅を引くのを得意としていたら

しい。セミつりは滑車を用いた方法で、現在のチェーンブロックに相当するもの。冒頭の伊勢音頭の「石は吊ってもつ」は、セミつりを指したものと考えられる。

玉堂美術館や吉川英治記念館を見学後に訪ねた飯能能仁寺、泉水の庭を拝見しながら一休み

永送り

枕渡しは、現代でも山から原木を運び出す際に、林業で行われている方法。多量の木材を筏のように横に敷き、その上に石を乗せ滑らせる方法。枕の滑りを良くするために、ムクゲの葉を煮たてた湯を潤滑液として用いた地方もあるらしい。ムクゲの葉が持つ脂を利用した先人の知恵である。枕に用いる材質は地方により様々であったらしいが、肥後の石工が活躍した鹿児島城築城の際には、屋久杉が使われたらしい。

余談だが、その城造りを終えた肥後の石工達が、国もと、現在の熊本県へ帰る途中、国境（くにざかい）で待ち伏せていた鹿児島藩主島津の家来たちによって、殺されたと伝えられている。城郭に関する様々な秘密を知っている者は、生かして帰せないということらしい。慈悲のかけらも無い、そのような非道を「永送り」と呼んでいたとのこと。

当時の石工達は、命を掛けて石と向き合う以外にも、命がけの危険が他にもあったということである。

修羅送りの修羅は、地方によってスリ、スラ、ズリ、ゾラ、ソリ等と呼ばれ、金比羅フネフネのシュラ、シュ、シュ、シュはこれを指しているという人もいる。

昭和53年大阪藤井寺市の三ッ塚古墳周濠底より、大小2基の修羅が発掘された。7世紀ごろ使われていたものらしい。

貴人口と躙口を想定し踏石を据え付ける。岸本会長、鈴木相談役と共に記念撮影

トラやおしみを取り踏石に据え付ける

大胡氏より指導を受ける修羅とコロの扱い方

玉堂美術館にて係員の説明を熱心に聞く

三又による景石の据え付け。繊細さが求められる。玉掛けのむずかしさを学ぶ

三又を安全且つ素早く移動するための作業。レッカー使用には無い呼吸合わせを学ぶ

太い樹木の二股を利用し、先端に大勢の人が引くための太い綱を通す穴が施してある。

原形を留めている長さ約12mの大きい方の修羅は、アカガシを用いた復元実験によると40t前後の石を運んでも充分とのこと。

三又

5月22日から始まった新年度の庭守講習会は、石材の古式運搬手法を学ぶというテーマで、別名「さんぞう」「ぼうず」「ちんまた」と呼ばれている三又の扱いを行った。

途中、庭園見学講習も含めた都合4回の講習も、11月13日をもって無事故、且充実した内容で終了した。

ワイヤーロープで三又を組むことから始め、結束された又を立ち上げ、少しずつ開き鬼噛（おにがみ）を回し、チェーンブロックを下げる作業を一人で行うことに挑戦する。

一昔前なら頻繁に見られた光景が、機械化の進んだ現代では、珍しく又忘れられようとしている。顔を真っ赤にして、満身の力で三又の立ち上げに挑戦する講習生の姿を見ながら、有意義な講習会であったことを実感する。この講習会から、何を会得したかは各自それぞれ異なるかも知れない。しかし、共通して感じたものもあると思う。

それは先人たちが残した知恵ではないか。そしてその知恵は、現代でも決して色褪せてはいないと。万力取り、セミ吊り、枕渡し、修羅送りに宿る先人達の知恵は、飛鳥の石舞台のような、一石が70tにも及ぶ巨石墳墓の構築を果たし、広大な城郭に敵をよせつけぬ、しかも優美な稜線をともなった石垣を積み上げ、決して崩れ落ちることのない、強固な石橋を架け、恐ろしいほどの力を持つ水に立ち向かう不動の護岸を築き、数百年の長きに渡って人々に感銘を与え続ける石組を庭園に残した。

日常の仕事で経験することが困難な、先人達の知恵から生まれた技能の一端を、講習という形ではあるにせよ、庭守で行うことが出来たことは幸いと思っています。

庭守に参加して

㈱金盛園　神山　洋

神奈川県造園業協会の技能士コースで、石材などの授業を受けた時、受講生の我々職人にわかりやすく熱く講義をされていたのが荒川先生でした。

その時から、8年、荒川先生が伝統技法、日本の庭造りの文化、その中にある精神を学ぶ。庭守という勉強会を作り参加者を募集していると聞き、是非勉強させて下さいと2期目より滑り込みで参加できることになりました。

初回の集まりでは、職人としての心構えや、技よりもまず人としての礼儀、頭を垂れ教えを乞う事の謙虚な気持ちをもつことの大切さなど、初心に返る打合せ会からスタートになりました。

その時から早くも3年目になりますが、毎回前日の夜から緊張します。何百年も経て当時の職人達が触れてきたであろう貴重な石材に触れる事の出来ることの高揚感と怖さ。一日かけ造りあげた風景はその日のうちに無くなる、石を据えている作業の感覚の一つ一つは一瞬の連続で、二度と同じ事は経験出来ない事を想像してしまうからです。

講師の方々が勉強会の前々から、休日返上で検討を重ね準備して下さった正しく本物の石材をトラック山盛りに積み込んで会場に現れる時は緊張感のピークに。

いざ勉強会では、一班の渡部講師と二班の川田講師と別れてテーマに沿った別の庭を造ります。二班の私は川田講師から「チャッチャと据えてく」と発破をかけられますが、その「チャッチャ」には講師の方々が経験した多くのものが詰まっており、講師の方々は、その仕上がりの風景が見えているのです、その感覚を少しでも盗もうとしておりますが、石を動かすだけで、据える感覚にはほど遠いです。

勤めている会社の社長に、モタモタやっていると「かせ、俺がやる」と、言葉だけではなく実際に仕事を見て育ててもらいました。当時はお寺さんの本堂の改修に伴う庭の全改修や、個人のお宅で石を入れた庭園を造る仕事など、社長の頭の中の設計図や感覚を察しながらの毎日は無我夢中でした、社長が伝えようとしている事を察することで仕事を体にしみこませてきました。今、後輩が増え、伝える事の難しさを実感しつつも、後輩と共に勉強の毎日です。

人に自分の知識、特に技術を伝えるということは非常に大変で、まして勉強会という大人数、短時間の中で伝えるのは難しいことです、講師の方々は、目で盗み体で覚えてきた事、職人にとっては宝を言葉やホワイトボードを使い、実際に技を示し伝えて頂いています。

庭守という会は、講師の方々の長きに亘り培ってきた伝統ある技術、知識経験、大先輩の知識や経験もあり、若くしてバリバリ仕事をしている方の今の感覚、今勉強されている方の発想などと、さまざまな知識、経験、感覚、発想が集まり、それを体に浸み込ませている場所となっています。

6月の勉強会の後では、会長の荒川講師が東日本大震災の被災地に瓦礫の撤去などボランティア活動をしてこられたお話を聞き、自分には何が出来るのか心揺さぶられる回でもありました。

㈲ヨシムラ　吉村　操

庭守に参加して2年が経ちました。振り返ると、日々の仕事に充実感はあったものの、もっと吸収しなければいけない事もあるのではと考えていたところ、協会報の庭守募集を見ました。自分一人では何から始めればよいのか分からないが、庭守への参加で多くの事を学べるのではと思いました。

庭守では自分が経験した事のない内容ばかりでした。当初は、頭で考えれば手足が止まり、体を動かせば上手く収まらない。講師の方の話を聞くのが精一杯でした。講習の回数を重ねるごとに、少しずつではありますが、場の雰囲気・石の扱いなど体で感じる事が出来るようになってきたと思います。

庭園見学では、講師の方々をはじめ大勢の庭守メンバーと回る事で自分では気付けない事に気付き、感じる事が出来、とても勉強になりました。基本が出来ていなければ良い仕事はできないと思います。庭作りに正解はないと言いますが、庭守で勉強した事を生かし、経験を積み、これからの仕事に取り組んでいきたいと思います。

講師の皆様をはじめ、庭守に関わるすべての皆様に感謝いたします。